

歴史散歩

美杉ふるさと資料館の銅鐘どうしゅう

美杉町上多気のみ美杉ふるさと資料館に、津の
鑄物師辻種茂が作った銅鐘が展示されています。

この銅鐘が所蔵された経緯は、はつきりとは
分かっていませんが、かつて火の見櫓の半鐘（火
災や洪水などの災害時に打ち鳴らして住民に危
険を知らせたもの）として使用されていたと言わ
れています。その名残なのか、龍頭と呼ばれるつ
り手の部分には、今も赤いペンキの跡があります。

この銅鐘は高さ約66cm、口径約38cmで、梵鐘
としては小ぶりのものです。鐘上部の龍頭は双
龍で中央に宝珠を頂き、鐘を突く部分の撞座は
複弁8葉の蓮華文で、中心には9粒の蓮子を鑄
出しています。鐘身に明和5（1768）年の年
号や「勢州二志郡竹原持経村 持経山三光院真
福寺」「金百疋 先祖菩提 法誉」「勢州洞津住 辻
越後藤原種茂作」などの銘文が刻まれているこ
とから、もとは美杉町竹原の真福寺の銅鐘で、



明和5年銘 辻種茂作の銅鐘

供養のために作られたことが分かります。

作者の辻種茂は、祖である辻越後守家種から
数えて6代目、江戸中期に活躍した鑄工です。
子午の鐘（久居幸町）をはじめ、加良比乃神社の
銅灯籠（藤方）など、種茂の作品は県内各地に
数多く残っています。

鐘身に刻まれている「竹原持経村」は、現在の
JR伊勢竹原駅辺りの集落で、真福寺は昭和11
年に持経から雲出川の対岸へと移転しています。
昭和30年に刊行された「二志郡史」には、真福寺
のページに明和5年銘のこの銅鐘が記載されて
います。しかし、現在、真福寺本堂の軒先には、
銘文のない銅鐘が懸かっています。この明和5年銘
の銅鐘が寺から離れることになった理由につい
ては、「二志郡史」に記載はなく、寺にも近隣にも
伝わっていません。

この銅鐘が寺から離れた原因として考えられ
るのが、戦争時の武器生産に必要な金属の不足
を補うため、昭和16年8月に出された金属類回
收令による供出です。当時、どの寺院から梵鐘
が供出されたのかを記録した資料はありません
が、辻越後家が製作した梵鐘には、その歴史的
価値の高さから供出を免れた例もありました。
そこで、梵鐘の供出を一時延期するべきかどうか
を選別するための昭和17年の調査「三重県梵鐘

調査書」（三重県所蔵）を調べてみましたが、この
銅鐘の記載はなく、残念ながら戦中の供出との
関わりを明らかにすることはできませんでした。

この銅鐘がどのような経緯で、火の見櫓の半
鐘として利用されることになったのかは定か
ではありませんが、そのおかげで、今日まで失われ
ることなく、資料館へと伝わってきました。この
銅鐘に秘められたドラマを想像しながら、歴史
ロマンを感じてみませんか。

美杉ふるさと資料館 入館無料

開館時間 9時～17時（入館は16時まで）

休館日 毎週月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）

12月28日～1月4日



※JR名松線は、家城～伊勢奥津間でバスによる代行輸送を行っています。